

外岡立人先生は、2001年から小樽市保健所に所長として着任し、もともと興味をもって取り組んでいた公衆衛生の分野で成果を残す。特にインフルエンザ関連では、情報ウェブサイト『鳥及び新型インフルエンザ海外直近情報集』を立ち上げるなど、世界の情報をいち早く国内に発信する役割を担ってきた。現在は医学ジャーナリスト・作家として活動されている外岡先生に、パンデミック2009での経験を振り返りつつ、日本のパンデミック対策の問題点と今後の課題についてお話を伺った。



外岡立人

元 小樽市保健所所長・
医学ジャーナリスト

2009年の新型インフルエンザの教訓とこれからのパンデミック対策

世界発の感染症情報を日本で最も早く発信

——先生のご経歴について、簡単にご紹介ください。

外岡 北海道大学医学部を卒業後、小児科医として働き、ドイツ留学を経て、1984年から2001年までは市立小樽病院の小児科部長を務めました。その後に小樽市の保健所長に就任したのですが、小児科ではインフルエンザをはじめ感染症が重要なこともあり、従前から公衆衛生には強い関心をもっていました。

——感染症の情報共有サイト『パンデミックアラート(旧・鳥及び新型インフルエンザ海外直近情報集)』を始められた経緯をお聞かせください。

外岡 保健所に異動して間もない2003年に、中国でSARSの流行が始まりました。WHOの情報はジュネーブ発で、日本ではまだ未明の3時半から4時ごろに更新されます。SARSの流行時から、私はその情報をインターネット経由で直接見て、厚生労働省からの発信を待たずに対策をとっていました。『鳥及び新型インフルエンザ海外直近情報集』の立ち上げは2005年ですが、WHOや

米国CDCの情報をいち早く翻訳してウェブ掲載する作業は、このSARSのときから始めていたのです。その後H5N1鳥インフルエンザやその他の問題が続けて起こり、今日の『パンデミックアラート』に至っています。

このような情報発信サイトは、一度始めてしまうと常に閲覧に来る読者がつくので、自分の都合で休んだりやめたりすることができなくなります。特に、SARSのように半年くらい毎日のように各地で患者が出て、日本でも患者が出るかもしれないという緊張感が続く状況下では、自分の中の情報の流れを途絶えさせないためにも、未明からの情報収集を毎日続ける必要がありました。結果的にSARSはあれ以上広がらず、多くの人はもう忘れてしまっているでしょう。それが当たり前であり、裏でずっと頑張っていた人間がいたという記録もどこにも残らないのが、公衆衛生の仕事の辛いところです。

2009年の新型インフルエンザ対策において、日本では専門家の意見が反映されなかった

——2009年の新型インフルエンザに対する、日本と欧米の対応の違いをお聞かせください。